「兼好自撰家集」の伝本の流布状況（上）

稲田利徳

一

齢六十を越えたころ、兼好は長年にわたって書き留めてきた詠草類を整理し、家集編纂を思い立ったようである。

その家集は部立を基軸に据えたものでもなく、さりとて詠歌年時配列でもない特異な配列によった、従前に類をみない斬新な編纂方針のもとで成立したものであった。そこに収録された詠歌には、二十歳代のもの、出家前の苦闘を吐露した三十歳前後のものから、編纂時に近い頃の歌まで、相当長い歳月にわたる歌を収載している。その収録歌数は二百八十余首と、さして多くはないが、かなり精選し、そこに南北朝という動乱の時代を生きぬいた一人の知識人の、和歌を介しての生の軌跡が浮上するように企図されている。

現在、その自筆草稿本が伝襲され、前田育徳会尊経閣文庫に所蔵されていることは、極めて稀有な事跡といわねばならない。この自筆草稿本が現存する以上、多数散在する「兼好自撰家集」（以下、「家集」と略称することがある）の伝本を収集、調査することは、兼好あるいは「家集」の享受状況を察知するという点で益することはあっても、本文的次元ではほとんど意味をもたない作業であることは自明のことである。現在まで「兼好自撰家集」諸本論といった類の論考が公表されることがなかったのも、しごく当然のことといえよう。

ただ、兼好は草稿本を作成し、それをもとに盛んに推敲を加えているが、これを浄書し、誰かに提出した可能性は十分にある。井上宗雄氏は、その浄書本は「公賢か誰かに提出したのであろう」「浄書本は持明院殿に執進され、風雅撰集の資料に使われた後の行方はわからない」[1]とも推測している。

この浄書本が、現存する自筆草稿本の塗洙や見せ消ち、推敲の跡を忠実に辿って清書した本文を有するものなのか、あるいは若干の歌が加えられ、清書段階でさらに推敲を経たものであったかどうかはわからない。

どうも兼好は、草稿本の方は自分の手許にとどめていたようで、老衰を感じ、死期の近いことを感じたころに、さらに末尾に八首を付加している。彼は観応三年（一三五二）以降、ほどなく死去したと思われるが、現存する自筆稿本は、死後、あるいはその直前に、誰かの手によって持ち出されたのであろう。

前田家にこの本が入ったのは、三代小松中納言利常（万治元年死去）の頃であり、本書の転写本の一本の奥書によって、明暦の頃（一六五五～一六五八）には、すでに前田家にあったという[2]。

また前田家に入る以前であろうか、中院通村（承応二年没）が、寛永三年（一六二六）にこの自筆草稿本に接し得た感悦を識語にとどめているが、この事実からすると、兼好の死後から通村による発掘までに、実に二百七十年も経過していることになる。その間、草稿本はどこに伝襲されていたのか不詳である。

「家集」諸本を調査してみても、自筆草稿本を転写した室町以前の古写本が現存しないことからみても、長い歳月、人々の目に触れるこ

ともなく秘蔵されていたとみてよい。この現象は、同じ兼好の作品「徒然草」の辿った流布状況と近似のものがあり、改めて再確認する必要がある。

「兼好自撰家集」は、寛文四年（一六六四）に版本が刊行されているが、この他に写本が数多く現存する。『國書総目録』には、二十六、七本ほど、『私家集伝本書目』には個人蔵のものも含め三十余本、『古典籍総合目録』には三本ほどの写本の所在を記しており、これら重複するものを差し引くと、約四十本ほどの写本が全国に散在していることになる。他に、これら目録類に掲載されていないものも幾本かあり、未公開の個人蔵のものまで含めると、相当数の写本が現存、流布していることになる（因みに、寛文版本は、先の三つの目録の範囲では三十余箇所の所在を示されている）。

ここ二十余年ほど、機会を得ては、これら現存「家集」の写本の現物に当って調査を持続してきた。そういった調査を遂行してきたのは、儚い夢に終わることは重々承知しながらも、万一、諸本のなかに浄書本の姿を伝えるものがあるかもしれないという思いであり、たとえ、その種の写本が見出されなくても、「家集」の享受や流布状況とその周縁の問題を考究するのには、多少の意味もあろうと考えたからである。

現在、目録類で確認できるもので、未見のものも数本あるが、約五十本近くの写本を調査した。けれども、その写本群に浄書本系の面影を伝える写本は遂に見出すことはできなかった。多数散在する「家集」の写本には、形態的に多少異なるものもあるが、すべて自筆稿本から派生したものとみなしてよい。

そこで本論考では、自筆稿本から派生した寛文版本やその他の諸本の系統分類を行い、それを通し、「家集」の流布・享受の状況に触れるにとどめたい。

二

「兼好自撰家集」の伝本研究は、先述したような理由もあり、研究者が触手をのばす気にならない領域であるが、それでも、これまでに、二、三の簡単な考究が公表されている。

一つは、冨倉徳次郎氏の『兼好法師研究』（東洋閣・昭和十二年刊）で、伝本を、（い）前田侯爵家本（この転写本に、明暦二年奥書本、寛永三年中院通村転写本がある）、（ろ）群書類従本、（は）寛文四年刊本の三系統に分類し、各々の形態的特徴や相違点を指摘している。

二つめは、高乗勲氏の『兼好家集（校本）』（古典文庫、昭和三十七年刊）の解題である。ここで高乗氏は御家蔵の西荘文庫旧蔵「兼好家集」を影印・翻刻し、この伝本が前田家本・寛文刊本・群書類従本と比較し、異同の多い一異本であること、そして、この異本は前田家本からの転写本系統本ではなく、「前田本に訂正加除が行われた整理本の系統に属するものであろう」という驚くべき推察を行っている。この推論自体は後述するように、妥当なものとは思えないが、その考察過程で各系統の異同に詳細に触れている。

三つめは、井上宗雄氏の「兼好家集」（『徒然草講座　第一巻』（有精堂・昭和四十九年刊所収）で、『私家集伝本書目』『國書総目録』の両目録にみえない、岡山大学池田家文庫本・成田図書館本など数本の所在と系統分類、及び「家集」を解体して部立配列した高山郷土館香木園文庫本などを紹介している（なお、同氏著『中世歌壇史の研究　南北朝期』にも伝本に触れている）。

こういった先達の研究成果も勘案しながら、ここでは、(1)自筆稿本と寛文版本との比較、(2)自筆稿本と群書類従本との比較によって、各々の異同や形態的特徴をおさえておき、次に諸本を各系統に分類してゆきたい。

(1)自筆稿本と寛文版本との比較

寛文四年版本は、自筆稿本の末尾にある寛永三年の中院通村の識語

の後に「此一冊者右以中院前内府通村公自筆之本写之墨滅假名遣随写本而已」とあり、通村の転写本を底本にし、若干手を加えたものであろう。

自筆稿本と寛文版本との相違点を列挙する。

○歌数―寛文版本には自筆稿本の三五番歌の次に、

ある人にいさなはれて四国見にわたりし時波風のあらかりしことをおもひいて、

世の中をわたりくらへて今そしるあはのなるとはなみ風もなし

の歌がある。後人による補入歌であるが、写本が版本系か否かを判断するのに基準となる増補歌である。

○配列―自筆稿本の冒頭にある、

はるのころよりこむといふ人の秋になるまてとはぬに

春もくれ夏もすきぬるいつはりのうきは身にしむ秋のはつかせ

が、版本では巻末部の通村などの識語、家集の事の次に配置されている。

また、民部卿為定家での褒貶歌十八首の配列で、自筆稿本では、

蘭

ふちはかまのはらの露をわけかねてたかぬきすてしにほひなるらん

駒迎

いにしへは昨日やこえしひきつれてけふあふさかのもち月のこま

となっている配列順が、版本では逆配列となっている。

○構成

自筆本は巻頭に「家集事」という編纂メモがあるが、版本はこれを和歌本文の後、通村と某人の識語の次に配置している。

○見せ消ち・塗抹

自筆本には、見せ消ちや塗抹が相当多く加えられているが、版本は原則として、推敲後の本文に依拠している。ただ、その方針は厳密ではなく、例えば自筆本の塗抹歌(4)(37)番歌のうち、(37)は収録していないが、(4)はそのまま入集させている。

○集付・人物注記

自筆本には朱筆で登場人物に注記、和歌に集付が加えられているが、版本にはこれを脱落した箇所がかなりある。

○本文

自筆本と版本との本文間には、例えば「秋のよ」(一三四)を「秋のころ」とするような異同が若干ある。また、版本には、数箇所イ本との校異が加えられている。

(2)自筆稿本と群書類従本との比較

群書類従本は、先の寛文版本にあった「世の中を…」の歌もなく、「蘭」と「駒迎」の配列も自筆本と同じである点からみても、版本系に属するものではない。けれども、自筆稿本系とは、次のような相違もあり、特異な形態を有する伝本である。

○歌数

自筆稿本の冒頭歌「春もくれ」の歌がない。また、自筆本の塗抹歌「あとたえて」(四)と「ならひそと」(三七)の二首をそのまま収録している。後者の歌は、二五九番にも再出するので、類従本はこの歌が二箇所に重出することになっている。

○構成

自筆稿本の冒頭にあった「家集事」は巻頭にも末尾にもなく、除去されており、さらに中院通村の識語とか奥書の類はなく、「雪の色に」(二)に始まり、最後「帰りこぬ」(二八六)の歌で閉じられる。自筆本と配列異同はない。

○見せ消ち・塗抹

自筆稿本の見せ消ちなどは、その指示に従っているところもあるが、無視している箇所もあり、一貫性がない。

○集付・人物注記

自筆稿本の集付・人物注記はかなり忠実に記入しているが、23番歌の「続後拾遺」、70・71の「入打聞」、149の「続現葉」などを脱落。151番歌の「藤葉」を「新後拾」とするが、「新後拾遺集」（雑秋・八三六）の入集は兼好没後のことである。他にも、81・170に「新千」、283に「新続古」の集付もあるが、これらも、兼好でなく後人の追記である。人物注記も、67番歌の「具守」などを誤脱。108番歌の詞書「正中二年」に「正中（後醍醐）二年」とあるのも後人の追補。

○本文

51番歌に「袖の色哉（かは集）」、55番歌に「世中を（うきよをも集）」と傍記するが、これは「風雅集」「続千載集」の異文を指示したもの。但し、51番歌は自筆稿本でも「袖のいろかは」とあり、類従本の誤写である。他にも「のちせ（いもイ）の山」（八八）といった、異本との校異を示す跡が数箇所ある。以上のように、類従本は自筆稿本から派生したものではあろうが、後人の手がかなり加えられた系統の伝本といえる。

三

寛文版本のほかに、現在までに管見に入った「兼好自撰家集」の約五十本ほどの写本は、先述したように、すべて尊経閣文庫の自筆稿本から派生したものだが、一応、(1)自筆稿本系、(2)群書類従本系、(3)寛文四年版本系、(4)西荘文庫旧蔵本系、(5)改編本系の五系統に分類し、以下、伝本の所在、特徴、流布状況に触れておきたい。

(1)自筆稿本系

この系統本もその奥書などによって幾類かに分類できる。

①宮内庁書陵部蔵「兼好法師集」（150—544）

自筆稿本の見せ消ち・塗抹の指示に従って浄書本の方向で、ほぼ忠実に書写している。自筆本の巻末にある、

此一冊者兼好法師自撰家集」草本歟而彼集不流布于世」如今幸覧之云秀哥云能書」奇観何者如之不堪感悦聊誌之

寛永第三暦初炵上旬　　長秋員外監通村

という中院通村の識語に続いて、

此集兼好法師真跡（小松中納言所持）」奥書後十輪院内府筆也不慮」一覧如形令臨写早

明暦第二暦林鐘下旬　判

の奥書がある。「小松中納言」は金沢三代藩主前田利常（万治元年没）のこと、「後十輪院内府」は通村のこと。通村が識語を記した寛永三年（一六二六）から三十年後の明暦二年（一六五六）六月に、某人が前田家本を直接臨写した系統本となる。この奥書は自筆稿本が少なくとも三代前田利常の頃には、前田家の所蔵になっていたことを示唆する。

②宮内庁書陵部蔵「兼好法師集」（153—211）

③祐徳神社寄託中川文庫「兼好家集」（6・22・23）

④徳島県立図書館蔵森文庫「兼好法師家集」

⑤島原市立図書館蔵松平文庫「吉田兼好集」（136—33）

⑥龍谷大学図書館蔵「兼好法師家集」（九一一・二五・五〇・一）

これら五本は通村の識語の次に、すべて次の奥書を有する点で共通する。

右以照高院宮道晃法親王御本通村公自筆模写兼好法師自書〻写之

早写本処々口斜有不審故走筆而倉卒書之

萬治第三暦季夏下旬　判

この奥書によると、自筆稿本を直接転写した通村自筆本が照高院宮（道晃法親王）（延宝七年没）に存し、それを某人が万治三年（一六六〇）六月に転写した系統の伝本ということになる。なお『弘文荘書目』（一二四・二八）には阿波国文庫旧蔵の万治三年の写本を掲載

している由だが[3]、この系統の親本であろうか。

この共通奥書を有する②～⑥の五本は通村自筆本系統に立つとみてよいが、各伝本間に書写態度などに若干の相違がある。

②③の写本は、最初のあたりは見せ消ちなども自筆本のまま臨写しているが、やがてその書写方法をやめ、浄書本的に書写している。また、④の巻末には「寛文四年六月廿九日」の奥書がある。⑤の松平文庫本は、万治三年の奥書の次に、寛文版本の「弘文院林学士」の長い識語があるが、本文内容は版本系ではなく、自筆稿本系なので、後に版本系から識語だけを追補したのであろう。⑥は、巻頭歌（一）が六首目にあったり、所々に詞書や和歌を誤脱している。「萬治三季夏下旬　守中」と他の四本にない「守中」がある。これはこの系統本の書写者を示すものだろうか。さらにその奥書の後に、

兼好法師

あはれけにならはぬ床の旅ね哉都に似たる月はすめとも

の和歌と「和歌難波津」に掲載するという、兼好・頓阿・浄弁・慶運の和歌四天王の和歌四首を書写している。ただし「あはれけに」の歌は兼好歌でなく、「新千載集」（羇旅歌・七八七）入集の尊円の歌である。

⑦東海大学中央図書館蔵桃園文庫「兼好家集」（桃30・36）

⑧慶応大学図書館蔵「兼好家集」（89―196）

⑨今治市河野記念文化館蔵「兼好法師家集」（352―910）

⑩ノートルダム清心女子大学附属図書館蔵「兼好家集」（黒一―C54）

これら四本は元禄頃に転写された祖本の系統に属する。

⑦の桃園文庫は例の通村の識語の後に、次のような長い奥書を記している。

此兼好集は則兼好自筆の本にてもとは加州の太守肥前守利常卿の所持也（懐紙に裁て上の隅に雨滴あり古金襴二面つる袖うら銀の後裏の砂子丹青の模様あり本の堅七寸四分横五寸二分十行九行十一行さたまらず巻付五十一枚あり）此本を明暦帝天香院宮智忠親王におほせて可有　叡覧のよしにて持明院大納言基定卿烏丸権大納言資慶卿ある隠者の故ある筆に切なる者におほせて叡覧の後毫釐をたかへすうつしとらしめ拾ふわれ縁あることありてかり得てうつし侍りぬと古峰清生の書ける本を打它雲泉かりてうつし侍るをまたかりて本のまゝうつし私に異本を見合いさゝかたかひ侍る物もかたはらに附侍るなり

元禄十丁丑年霜月三日　良以判

さらにこの後に、故池田亀鑑氏が朱筆で、この巻末奥書によって転写の過程を知ることができると前置きし、「後西院天皇が原本を一覧せしめ給へる時、持明院基定、烏丸資慶ら相はかりて古筆をして臨摹したりしを借り求めて更に転写し異本と対校せしことを知る。本文批判の材料として貴重すべきものなり」（昭和二十五年十月二十八日　亀鑑）と、先の奥書を解読、この写本の存在意義を認めている。

この写本の転写過程を想定すると、ある隠者（古筆家）→古峯清生→打它雲泉（打它公軌）→良以ということになろうか。

⑧の慶応本は⑦の系統に立つ本で、元禄十年の「良以」の奥書の後に、

元禄十四重光大荒落書窓下浣之日
於江城之旅館写之　　酔月堂人

の奥書が存する。さらに「家集」にみえない兼好の勅撰集入集歌を追補している。

⑨の河野本は⑦⑧の系統に立つと思われるが、通村の識語の後に「追加奥書云」として、先の「良以」の奥書と近似のものを記しているが、奇妙なことに相違するところがある。

最初の自筆本の書誌的な体裁を明記した部分はほぼ同じであるが、その次から引用すると「明暦帝天香院智忠親王におほせて叡覧にそなへしめ給ふ其後持明院大納言基定卿烏丸権大納言資慶におほせて□のおくに」まで記し、次の裏紙には「元禄第九暦中夏下旬」の年月日だけがある。次の丁の表から、「なるものをして其名仮名一字

をもたかへす或墨けし或はなをしあらためにいたるまてたゝそのまゝに毫釐をたかへすうつしとゝめしめ給なり古峰縁ありてかの本をかりえていさゝかもたかえすうつし又此本の由来をも心のことくしるしゝなりいま又かりえて一字をもたかへすうつしとゝむるなり」と記し、「元禄乙亥四月廿二日　稀子老夫　謙斎」と書写年時を付している。この奥書には丁移りなどの箇所に若干の脱文がある感じであるが、内容から判読すると、河野本は、ある古筆家→古峰→謙斎の過程で転写した本のように思える。⑦⑧の打它雲泉本を対象とせず、古峰本に依拠したものであろうか。⑩の清心女子大本は、元禄八年の謙斎の奥書を有しており、河野本の系統に立つ。

この他、自筆稿本系統に属する写本には、次のものがある。

⑪東海大学中央図書館蔵桃園文庫「家集兼好法師」（桃30―35）

⑫宮内庁書陵部蔵「兼好法師集」（「老若五十首歌合」などと合綴）（151―367）

⑬賀茂別電神社蔵三手文庫「兼好家集」（甲253）

⑭河野記念文化館蔵「兼好法師自撰哥集」（123―911）

⑮国立公文書館内閣文庫「兼好家集」（201―516）

この五本は、いずれも通村の識語を有し、構成・内容から判断しても、版本系ではなく自筆稿本に属するとみてよい。ただ各本の書写態度は必ずしも同一方針ではない。⑪は、集付・人名注記・見せ消ちなど、原本に忠実に臨写したところと、そうでないところがある。奥書の類はないが、巻尾に「立甫書」とある。⑫は原本の見せ消ちなども臨写しているが、「イ本」と校合している。⑬は原本を臨写的に書写しているところと浄書的な所が混在。⑭は浄書的に書写。⑮の内閣文庫本の対象としたのは自筆稿本系であったと思うが、寛文版本や類従本と校合しているので、現状では混然とした本文になっている。例えば、第一丁表には、右肩に小字で「此集に見えす、板本巻一九丁オに出たり」と、例の版本特有歌「世の中を」を記している。また、通村の識語の次には、寛文六年十一月、寛文七年六月の書写奥書を有し、さらに青筆で「天保十年己亥六月廿九日以流布印本校合畢　伴直方」の奥書があるなど、全体にわたり、朱筆（類従本）、青筆（版本）との校合が加えられている。

(2)群書類従本系

この系統本は版本として流布しているにもかかわらず、その転写本などもほとんど存在しない。

⑯群書類従巻二六九「兼好法師集」

自筆本から派生したものだが、巻頭の「家集事」とか通村の識語などを削除、集付などにも兼好没後の勅撰集名があるなど、後人の手による賢しらな削除・追補がなされている。

⑰天理図書館蔵「兼好法師集」（911・23・67）

六つの私家集と合綴。そのうち「寂然法師集」「寂蓮法師集」など「兼好法師集」と同じ類従巻二六九の家集が含まれていることや、「家集事」・通村の識語・「春もくれ」の歌のないことからみて、類従本系の転写本であろう。

(3)寛文四年版本系

寛文版本系か否かの目安は、この本特有歌の「世の中を」の有無、「蘭」（118）と「駒迎」（119）が逆配列になっていること、それに巻頭歌の「春もくれ」の歌が巻末にくることなどである。

この他、「寛文甲辰之夏、弘文院林学士」という林春斎の識語を有するもの、さらに「洛陽今出川　林和泉掾板行」の書肆まで書写した版本そのものの転写本など、幾種類かに分れる。

⑱東海大学中央図書館蔵桃園文庫「兼好法師家集」（桃30・37）

⑲天理図書館蔵吉田文庫「兼好法師集」（81・吉125）

⑳東海大学中央図書館蔵桃園文庫「兼好法師家集」（桃30・38）

㉑ノートルダム清心女子大学附属図書館蔵「古歌集」所収「兼好」（C－12、4－2）

㉒北海道大学附属図書館蔵「兼好法師家集」

この五本は、「世の中」の歌があり、118番歌と119番歌の配列が逆、巻末に通村の識語、「家集事」「春もくれ」の歌があって版本系に属するが、版本にある「弘文院林学士」の識語が無いことで、ほぼ共通する。

⑱には「寶暦四甲戌年仲春吉辰　於平安城利恭写之」、⑲には「于時寛文十暦庚戌二月上旬　西京隠士柴氏家時」、⑳には朱筆で「右一冊子亡師谷神軒西蓮法師中年之書写也　良弘誌」、続いて「嘉永第二己酉のとし霜月中つかた源可直うつす」などが各々あり、書写状況などが察知できる。

㉓金沢文庫蔵「兼好法師家集」（911・11・Y）

㉔東北大学附属図書館蔵「兼好法師家集」（狩・4－一〇六六三－一）

㉕東海大学中央図書館蔵桃園文庫「兼好家集」（桃・30・39）

㉖岡山大学附属図書館蔵池田家文庫「兼好法師家集」（P911・67）

この四本が版本系に属することは確かである。ただ先掲の⑱～㉒のように「弘文院林学士」の識語のない点は共通するが、各写本により各々に相違する面があるので一括して紹介しておく。

㉓は、118番歌と119番歌が版本系と相違し、自筆稿本と同配列ではあるが、例の「世の中を」の歌もあり、構成も版本系に同じ。㉔は版本では巻末にある「春もくれ」の歌が巻頭に配されている。表紙見返しには、「右本ハ妙政寺日延所持之本并吉川杏順所持ノ本ヲ以写之イトアルハ吉川氏ノ本ノ趣也」と記す。㉕は通村などの識語・奥書の類は一切ない。また、㉖は、恐らく版本系の本をもとに、詞書の長いものは上部や下部を適宜省略し、歌本文を書写したもので、識語・奥書の類もなく、やや杜撰な体裁の伝本で、独自の脱落歌もある。このように四本は、⑱～㉒と相違する面もあるが、版本特有歌の「世の中を」の歌を存するなど、版本系に立つことは確かである。

次に掲示する写本は、冊子としては一冊であっても、内容を上・下に分け、下の巻頭に「思ひ出る」（一八三）の歌を配置する点、（35）と（36）との間に「世の中を」の歌があり、118・119番歌が逆配列、さらに巻末部に通村の識語、「家集事」「春もくれ」の歌、「弘文院林学士」の識語が続くことなど、ほとんど寛文四年版本と同じである。ただ、寛文版本の「洛陽今出川　林和泉椽板行」の書肆の指示はないが、寛文以前に遡る古写本のないことから判断すると、版本そのものの転写本の可能性もある。

㉗東海大学中央図書館蔵桃園文庫「兼好法師家集」（桃・30・34）

㉘大阪市立大学附属図書館蔵森文庫「兼好法師集」（911・YOS・森文庫）

㉙蓬左文庫蔵堀田文庫「兼好法師家集」（堀319）

㉚東北大学附属図書館蔵「兼好法師家集」（狩4・一〇六六二・一）

㉛早稲田大学図書館蔵「兼好家集」（特へ・4二九・一四）

㉜三康図書館蔵「兼好法師集」（5・一四七一）

㉝東大寺図書館蔵「兼好法師歌集」（「鴨長明道記哥」と合綴）（42・48）

㉞国立国会図書館蔵「兼好法師家集」（京乙・386）

㉟国立国会図書館蔵「兼好家集」（911・148・Y795K）

㊱神宮文庫蔵「兼好法師家集」（3・一一六一）

㊲無窮会図書館蔵「兼好法師家集」（一〇一三〇）

㉙には「于時享保拾九甲寅年九月下旬　宇都宮氏綱當以写本令謄写之訖　紀知之」という堀田知之（寛政九年没）の書写奥書、㉚の末尾には、「伊賀国志」にみえるという「吉田兼好墓」の所見を付加、㉜には「寛政辛亥之屯日写焉　由比氏藤原演徴」の書写奥書などが各々に記されている。また㉝は「鴨長明道記哥」と合綴するが、巻末に、延宝七年二月下旬の清因、享保十四年六月二十七日の権律師浄俊、享保十七年四月の宝生聖成慶の書写奥書が加えられているが、これは前半の「兼好法師家集」にもかかるものであろうか。㉞

には錯簡箇所がいくつかある。『図書館目録ガード』では「林春斎写」と判定しているが存疑。

㊱の神宮文庫本の表紙見返しに「會田安昌自筆校本（本書も悉く安昌の写所なり）」と記し、さらに自筆稿本の最後の歌「かへりこぬ」の次に、「園太暦」にあるという三首の和歌を菅原夏蔭が追加、朱筆で「天保八年五月以長監宗仙蔵本一校」「明治十三年十月十五日以群書類従本校合了　安まさ」とあり、さらに巻末に、家集になく勅撰集にみえる兼好歌十一首も追補している。また、その途中に「文久の三とせひとわたりよみをはりぬ（花押）」の記事もある。㊲の無窮会本も表紙に「會田安昌校本」とあるように、内容は神宮本と同じである。

㉗～㊲に近いものには次の写本も存する。

㊳河野記念文化館蔵「兼好法師家集」（352・909）

㊴慶応大学図書館蔵「兼好法師家集」（133・113）

㊵松浦史料博物館蔵「兼好法師集」

㊳は上・下巻の区別はしていないが、内容は版本とほぼ同じ。巻末に「元禄二巳歳弥生廿六日」という「神護憲広」の書写奥書がある。㊴は寛文版本の末尾にある「弘文院林学士」の識語が、いきなり巻頭に配置され、巻末に「嘉永六癸丑年中秋写之、　七十九翁□天茶園」と書写奥書もみえる。㊵は、その原因は判然としないが、巻頭に「正中二年春宮より哥合の哥めされ侍しに」の108・109番の二首が掲出されている。その他は版本と同じ。

これら三本は㉗～㊲と構成上、若干の相違はあるものの、それは後人の所為によるもので、同系統に属するとみてよい。

また、次に掲示するものは、巻末に寛文版本の書肆「洛陽今出川林和泉掾板行」まで記しており、内容・構成も版本と同じである点、寛文版本の転写本とみなしてよい。

㊶東京大学文学部国文研究室蔵「兼好法師家集」（中世・11・14・12）

㊷本居宣長記念館蔵「兼好法師集」（文学6・67）

㊸金沢文庫蔵「兼好法師家集」（911・13Y・1）

㊹清水文庫（架蔵）蔵「兼好法師集」

㊶の巻末には「文化十三丙子年春二月写之」の書写奥書がある。

なお、寛文版本そのもののなかにも、慶応大学図書館本（88・89）のように、「家集」にみえない兼好の勅撰集歌を追補したり、兼好伝を加えたり、他本と校合したものもあるが、そういった類の版本の紹介は、ここでは割愛する。

［注］

(1)『中世歌壇史の研究　南北朝期』。

(2)前田家本の解説（尊経閣叢刊）。

(3)『私家集伝本書目』による。

（未　完）

（平成七年十一月十四日受理）